

木村文助研究

通信

15号 2007年4月5日

「赤い鳥」に載った綴り方連載が復活

大野町教育広報「おおの」に連載されていた「赤い鳥」綴り方が合併により、昨年一月号で終わった。

しかしこのまま中途半端にさせないことから、一〇月に行われた文保研と市教委との市政文化財保護懇談会でその意義を話し、復活を訴えた。

北斗市教育広報「きらめき」No.3(二月二三日発行)で「先人の宝読んでみませんか」の見出しで「赤い鳥」発刊の経緯、木村文助の実践が改めて紹介され、次号から綴り方を載せるといふ予告があった。

そしてNo.4(三月二三日発行)で復活し、大野小学校高等科二年「若松きよ」の綴り方「父」(推選)と鈴木三重吉の選評、さらに木村の業績が載った。

広報は二万余世帯に配られ、その内七割以上は上磯地区の家庭で初めて目にする文でしょう。少なからず反響があった。「リアルですごい」「方言に興味が沸いた」「親子の対話ができた」などである。編集委員会の取り組みに敬意を表したい。

一九年度の教育行政執行方針に盛り込まれている文化財保護の観点からも先人の宝を大切にすることは重要である。「きらめき」記事の充実を願って止まない。

なお今年には木村編集の「村の子供」発刊八〇周年、同氏没後五五年に当たり記念事業を行いたい。

二〇〇六

五・二九「赤い鳥」入選の

原子(池田)イネさ

ん逝く

一〇・二〇 市政文化財保護

懇談会で広報掲

載復活を訴える

一一・四〇 文化祭で郷土資料館「赤い鳥・木村文助」コーナーへ多

数来室

一一・一九 「木村文助研究」通信No.14発行

一一・二〇 「赤い鳥」入選の赤井(富谷)千代さん逝く

一一・二〇 赤井みちよ氏より寄付金をいただく

一一・二三 北斗市教育広報「きらめき」No.3発行(先人の宝読んで

みませんか)社会教育課 小野義則氏

二〇〇七

一一・二三 当文保研が「函館の歴史的風土を守る会」より平成一八

年度「歴風文化賞」(団体賞)受賞

一一・二七 文化講演会で「赤い鳥」に触れる(講師岸伸子氏)

一一・九 「赤い鳥」入選の伊藤(斎藤)百合子さん逝く

一一・二三 北斗市教育広報「きらめき」No.4発行(赤い鳥に載った郷

土の作文)教育課 八木橋直弘氏

一一・二六 郷土資料館による「新大野町史」発刊に伴いふるさと歴

史講座で「赤い鳥・木村文助」に触れる(木下会員)



哀悼 赤い鳥入選者逝く

昨年本通信一三号で亡くなった田島たきさんの事跡を紹介した。その後三人の入選者が亡くなった。ご冥福をお祈りする。

原子(池田)イネさん

「支那人の手品」(推奨)・高等科

二年・昭和二年七月号

* 支那とは中国に対し戦前まで用いられた別称

赤井(富谷)千代さん

「子守のりさ」(推奨)・高等科

二年・昭和二年一二月号

他に自由画入選「田植え」(推

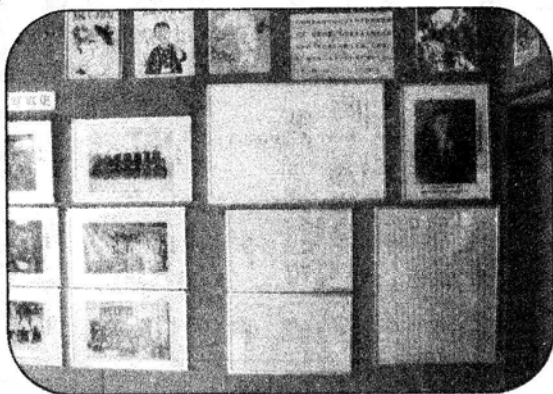
奨)・大正一五年一〇月

伊藤(斎藤)百合子さん

「おぢいさん」・尋常科六年・

昭和三年一月号

なお三人を含め六人の本人の写真と綴り方のパネルが北斗市郷土資料館「赤い鳥・木村文助」コーナーに掲げられている。



北斗市教育広報「きらめき」No.3 2006、12、23

先人の宝読んでみませんか

「赤い鳥」初めてこの名前を耳にする方もいると思います。

これは、一九一八(大正七年)から一九三六(昭和十一年)年までに童謡・童話・科学・歴史・綴り方・

自由詩などを

載せて発行された少年少女

向けの児童文学雑誌の名前

です。



小説家でもあり童話作家の鈴木三重吉は、当時の児童文学雑誌類の俗悪さをなげき「赤い鳥」を創刊しました。

彼は多くの文学・芸術家を結集し、児童文化運動を推進して歴史に多くの足跡を残しました。この雑誌には、運動に賛同した島崎藤村・北原白秋・芥川龍之介など多くの著名人の作品が載っています。

「蜘蛛の糸」(芥川龍之介)や「二房の葡萄」(有島武郎)をはじめとする数々の後世に残る名作がこの雑誌から送り出されました。

一九一八(大正七年)、第九代目大

野尋常高等小学校訓導兼校長に赴任した木村文助は、児童に優しい教育熱心な方で「子どもに自由な発想を重視する綴り方を書かせるべきだ」と鈴木三重吉主宰の「赤い鳥」の考え方に共鳴し、本格的に綴り方(今でいう作文)の指導に力を入れました。彼は母校の尋常科、高等科(当時村対象)児童の綴り方を「赤い鳥」に投稿、毎号のように入選者を出し掲載され、北海道の赤い鳥学校とまで呼ばれました。

雑誌に作品掲載されたことのある方々で現在も町内外にご健在の方もおります。彼は「北海道教育史(全道版)」の各教科教育功績者(戦前)の一人として選ばれています。

この雑誌は、当時の大野の文化の水準の高さや、地域や子どもたちの生活を知ることができ、郷土資料としても大変貴重なもの、表紙の絵の斬新さは一見の価値があります。

今回は、文書を紹介できませんが、次号より紹介させていただきます。

「赤い鳥」復興版は、北斗市郷土資料館でご覧になれます。



お問い合わせ(77-6681)

(社会教育課 小野義則)

※ 漢字や仮名遣いは現代風に改めています。わかりにくい表現は、かっこ書きで補足しました。

連載

『赤い鳥』に載った郷土の作文

今回から、大正から昭和の初めにかけて、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小学校児童の作品を連載します。赤い鳥には当時、大野小の木村文助校長が子供たちの綴方(作文)や絵などを投稿し、次々と入選。廃刊までに作文五十九点と三十五点の絵が掲載されました。

父(推奨)

大野小高二 若松 きよ

大正六年の九月、私が九つの時、父は汽車に轢かれて死んだのでした。その時分は山にいて炭を焼いておったが、節句(重陽の節句)に帰って来て餅を沢山持ってまた山に行く時、停車場(駅)の前の店に寄って、酒を飲んで酔った機嫌で線路に行って轢かれたのだそうです。

私が五つの時、父はある事情で私の家を出たのですが、その晩はなんだか淋しい晩で、母は「おらの背中を、何だかおぶさっていたようだ」と言いながら、背中をさぐっていた。私と兄とは母の顔ばかり見ていた。母が、がさがさすると誰か立っているのではないかと、窓から外ばかり見ていた。母は「何だか淋しい晩だなあ。寝るべし、

寝るべし」と言って早く寝た。少したつと「寝たがね、寝たがね」と戸を叩く音がしたから、

私は母を起こすと、母はむっくり起きて「はい」と言って片手をつき、頭を上げたきり耳をすましてみると、這入って来たのは父の祖母でした。いきなり母に「あの五郎、死んだって知らせ来たもんだ」と声をふるわせながら言って、上がり掛けに腰を掛けて、すくすく泣き出した。母は驚いて「あん」と思わず叫んで起きた。

それで私も兄も起きて、四人で父の家へ行って見ると、父の着てあった着物や白い手拭い三尺(三尺手拭い)などが、血のついたまま床板の上に投げたあつた。母は私と兄の手をぎっしり両方に引いて行こうとしたら、兄は「おれだっけあ見たくねえで、俺は見たくない」と泣

この連載は、平成十四年十月から十八年一月まで「教育おのの」掲載の続編です。これまでの掲載分は市立図書館本館・分館郷土資料館でご覧いただけます。

きながら手を振った。私もおっかなくなって泣いた。親類の人達は「見ねつの見せて気悪くすれば悪いして、かもねでおかせ(見たくないと言おうの)に見せて具合を悪くするといけないから、ほっておきなさい」と言った。それでも、私は母と二人で奥に行った。棺桶はもう縄を掛けられて、あたりには花が並べてあった。縄をとき、蓋を取ったら白い包帯で頭を包んだ父は、何とも言われない程、物凄く座っている。母は「うん、こんな死に方しねがら死なねもんだがな(こんな死に方でなければ死ねないものだろうか)」と言いはら、父の包帯した頭を夢中でばんと叩いて泣いた。

葬式の日、母も私も白い首物を着て、私に「膳飯」を持たせ、自分は金の花を持って行った。前の方で小さい鐘が、広い野原の中に、カンカンカンと静かに鳴って行った。焼き場(火葬場)に行くと、台の上に棺桶を上げて、薪を立てた。杉葉や薪に火がついて、煙が出た時、母は「もう帰るんだ」と言って、私の手を引いた。後ろを見ると、

杉林の間から、煙がもうもうと上がっていた。(大正十四年三月号)

ことばの意味

【大野小高二】大野尋常高等小学校高等科二年。当時は尋常科六年、高等科二年で、今の中二。【上がり掛け】入り口(玄関)の土間から居間へ上がる段差。【三尺手拭い】鯨尺(和裁用の物差し)で長さ三尺(約114センチ)ほどの木綿の手拭い。【膳飯】死者に供える盛り切りの箸を立てた飯。

綴方選評

鈴木三重吉

年級としては写象の把握が少し簡単すぎますが、叙写が純朴な上に、描き方が簡潔に印象的にまとめ上げられているため、下手な精密さを持って記述され

た作よりもずっと自然な感銘が受けとれます。お母さんが「何だか淋しい晩だなあ。寝るべし、寝るべし」と言われるあたりや、むっくり頭を上げ、片手をついて耳をすまして聞かれる前後やお父さんが亡くなられたと聞いて、立ち上がったところや、お父さんの死体の頭を叩いて泣かれるあたりなどは、よく活写的に描けています。葬式の日、野原にさびしく響く鐘の音に涙をののみ行くところや、杉林の中から火葬の煙が上がるのを見て帰って来るところなどは、簡単な叙写の中にしみじみとした悲哀がこもっています。若松さんの学校は木村校長が熱心な綴方研究家で、氏の努力で全校の年級がそろって私の希望どおりに引き上げられて行くので、私としても愉快でたまりません。(教育課 八木橋直弘)

木村 文助 (1882~1953)



明治15年、秋田県落合村生まれ。秋田師範を卒業して教員となり、29歳で校長となった。大正6年に来道、翌7年に大野小学校長として赴任し昭和3年まで務めた。その後、砂原小、日新小学校長を歴任し、昭和28年、森町で72歳の生涯を終えた。『赤い鳥』に子供たちの作文や絵が次々と入選し、当時、『日本一のつづり方学校』と言われた。昭和2年にはこれらの作品を集大成した『村の子供』(文園社)を発行している。作品には家庭や村の出来事があるまま題材となっており、当時の生活を知る貴重な史料でもある。

市郷土資料館に大野文化財保護研究会が収集した『赤い鳥』復刻版全巻や関係資料があり、閲覧できる。

資料閲覧(赤い鳥・木村文助コーナー)

「北斗市郷土資料館」

旧大野町市街地に入り大野小学校の校門を入って右側、木造の建物です。

〇四一一二二〇一

北海道北斗市本町二〇〇

TEL (〇二三八) 七七・六六八一

開館：九・〇〇〇～一二・〇〇〇

一三・〇〇〇～一六・〇〇〇

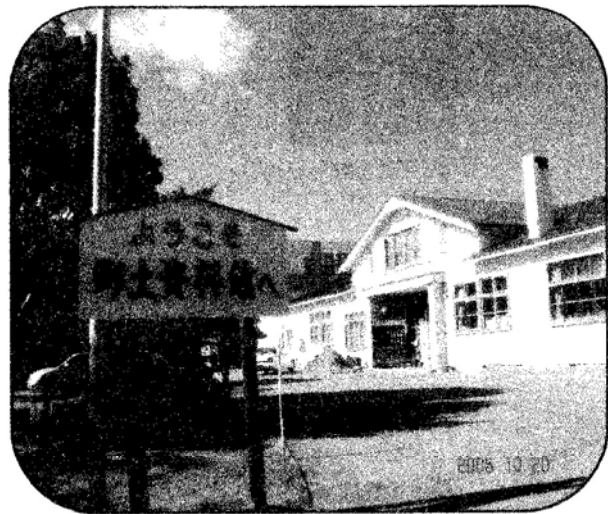
(郷土資料館係が対応します)

・休館日もありますので遠方の方は事前に連絡ください。

・函館方面↓車で、国道二二七号に入り旧大野町市街地まで、約30分。

・道北方面↓車で、国道五号の大沼トンネルを抜け、一〇分ほどして

大野方向に入って右折し、更に市街地を進み五分で着きます。



編集・作成：会報委員会

木下寿実夫、国塚妙子、古俣芳衛、

小松真之、島津晶二

発行：大野文化財保護研究会

(略称：文保研・ぶんぽけん)

〇四一一二二〇一

北海道北斗市本町六八

会長 木下 寿実夫

(〇二三八) 七七・八五三五